

「ハブノード」の存在と先生の問題を考える

根絶なんて考えないで、長期戦を

問題が明るみになるたび、社会的な議論が巻き起こる。だが、なかなか光明が見出せないいじめ問題。そもそも、根本的な解決策などあるのだろうか？ 子供のころからいじめを考えてきたという鈴木光司さんに聞いた。

作家
鈴木光司

●すずき・こうじ 1957年静岡県生まれ。『楽園』でデビューし、『リング』『ループ』『バースデイ』と続くシリーズは計800万部のベストセラーとなる。執筆活動以外に、自称「文壇最強の子育てパパ」として、自らの子育て体験を通じた講演活動も行なう。

厳罰や規則は逆効果

まず、いじめの「根絶」などは、絶対に目指してはいけないというのが僕の持論です。橋下大阪市長の桜宮高校の体罰問題への反応が典型的ですが、日本の社会では、問題が起きた場合、何が何でも根絶したがる傾向がありますが、でも根絶なんて

無理なんですよ。せいぜい、よりよい方向というか、いまより少しはマシな方向に向かうためには具体的に何をするのか——それを考えるのが現実的な対応です。

これまで人類がどのように問題を解決してきたのか？ どのようによりマシな社会を築いてきたのか？ そのことに思いを馳せれば、「根絶」などという考えが無茶な発想である

ことはわかるはずですよ。

いじめた者に厳罰を科すことにも反対ですね。いじめた側に厳罰を加えようとすれば、それこそ見つからないようにより巧妙かつ陰湿ないじめにエスカレートする可能性が大です。厳しい規則で縛っても、いじめが劇的になくなることは、まずない。いじめる側を悪とみなして罰すれば問題は解消するというほど、いじめ

の問題、構造は単純なものではないのです。

「厳罰」「規則」といった対処法で、いつとき効果が出たように見えることはあるかもしれませんが、結局は悪影響が大きく出てくる。僕は監視体制を強化するような対策よりも、クラス内の子供たちの関係性をよく見て重要視することが、少しはマシな方向に向かう第一歩だと思います。

宮澤賢治に救われる

僕が小学生のころにもいじめはありました。四年生のときには地味で目立たない女の子が一人いて、顔にニキビが出始めたりして、みんなから「バイ菌」「汚ない」と言われ仲間外れにされていた。

いじめられている女の子はとても辛そうな顔をします。それを見ると、

僕も辛く、悲しくなりました。でも周りの男の子は、その子が悲しい顔を見ればするほど、むしろいじめる。いじめられる子の悲しみや辛さが彼らには伝わっていない……すぐそこにいる人の悲しみが伝わらないことが不思議で、「人間とは一体どんな生きものなんだろう？」という興味が湧くと同時に、「もしかしてオレって変わってるのかな？」と不安にもなりました。いまならそれが自分の個性なのだと思いますが、子供心に、自分が人とは違うかもしれないという思いは恐怖でしたね。

精神的にちょうどそんな状態だったとき、国語の宿題で、宮澤賢治の伝記を読みました。そこで「女の子がいじめられているのを見て、自分の心に悲しみが流れ込んできた」という表現に出合った。そして、その女の子をいかに守ろうとしたかが書

いてあった。驚きました。ああ、ここに僕と同じ人がいるんだと安堵した瞬間です。他人の心と僕の心が通じたと感じる初めての体験でした。以来、宮澤賢治の作品をよく読むようになり、詩も書くようになりました。つまり僕が物書きになったきっかけは宮澤賢治であり、さらにその根っこにはいじめの問題があったということです。

その後、クラス内の班分けで、いじめられていた女の子と一緒の班になったんです。メンバーは六人、僕が班長で、ほかの子たちはやっぱり彼女をいじめました。

どうしたものかなあと考えて、僕は班のメンバーでピクニックに行く計画を立てたんです。幸い僕の父は、母の教育の賜物で、とにかく僕の言うことは何でも聞いてくれる（笑）。六人の子供を乗せて浜松から日本平